

進地域を重視し、辺境地域を軽視する嫌いがある。だが、ネパールやチベットなどの山間部やスリランカや香港などの島嶼部は中継貿易の要所であり、かつ貴重な特産品生産地であった。そのうえ、大国を結びつける地域としての役割も果たしてきた。こうした辺境地域の役割を示すことも重要であろう。また、第Ⅰ部と第Ⅱ部では中国・インドの研究が主に取り上げられていたが、実際にはパキスタン・バングラデシュ・台湾など旧植民地や第二次世界大戦後の分裂によって生まれた複数の国家や地域を含んでいる。これらは近年、中国（中華人民共和国）やインドと異なる経済発展や社会構造の特徴を示している。前述のように現代史の重要性が増している中、これらの国家・地域をどのように描くのかも重要な課題であろう。

いくつか議論の余地がある点を指摘したが、本書はアジア史やアジア経済史を志す初学者だけでなく、アジア研究に携わる方々にも有用であろう。それは単に関連する研究や資料だけに止まらず、これまで関心を払わなかった地域や時代、研究課題を見出しうることである。アジア地域に関心をもたれる方々にはぜひ手に取られることを薦める一冊である。

引用文献

- 愛宕松男, 1973a, 「幹脱銭とその背景（上）—13世紀モンゴル＝元朝における銀の動向」『東洋史研究』32(1): 1-27.
 ———, 1973b, 「幹脱銭とその背景（下）—13世紀モンゴル＝元朝における銀の動向」『東洋史研究』32(2): 163-201.
 杉山正明・北川誠一, 1997, 『大モンゴルの時代（世界の歴史9）』中央公論社。

石井米雄著。飯島明子解説。『もうひとつの「王様と私」』めこん, 2015年, 224p.

櫻田智恵*

はじめに

本書が発行された5ヵ月後の2015年の6月、演劇界最高ともいわれるトニー賞のミュージカル部門リバイバル作品賞に『王様と私』が輝いた。受賞はならなかったものの、渡辺謙がミュージカル主演男優部門に日本人で初めてノミネートされたことから、日本のメディアでも積極的に取り上げられ、これをきっかけに『王様と私』は、日本でも再び注目を集めることとなった。

この作品は19世紀のシャム（現タイ王国）を舞台にした「王様」とイギリス人女性家庭教師の「私」との交流を描く「歴史を背景としたロマンス」であり、実は当時のシャムについての誤解や誇張に満ちている、と本書は指摘する。本書の目的は、そうした「小説やミュージカルによって誤解の広まったシャムの『王様』の実像に迫り、この『王様』の思想に決定的な影響を与えた『もうひとりの私』と『王様』との長い交友のあとをたどり、それが、どのようにして『王様』の世界観に革命的变化をもたらしたかをたずねる」という3点にある（p. 10）。

2部構成で、前半が石井米雄による「もうひとつの『王様と私』」、後半が飯島明子による「解説 王様の国の内と外—19世紀中葉のシャムをめぐる『世界』」である。2010年

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

に急逝した石井米雄の遺稿となった前半に、解説者である飯島明子が丹精な註記を加え、かつ 19 世紀シャムの社会背景について詳細に解説した秀作である。もともと石井が「一般読者が読みやすいよう、註などを排した書物を意図」(p. 193) して執筆していたためか、全体は平易で読みやすく、「王様と私」と対をなす「もうひとつの」物語を読んでいるかのような印象すら受ける。それだけでなく、解説者が随所に書き込んだ註釈の厚みの効果で、タイを良く知る人々の知的好奇心も満たす良書になっている。

本書が扱う人物は、「王様」である現バンコク朝の第 4 代国王モンクットと、「もうひとりの私」であるキリスト教宣教師パルゴア神父である。両者の半生や、宗教を超えた交流の深化の過程について、そしてそれがシャム社会に与えた影響について、膨大な史料を駆使して描き出している。なお、本書は多くの節から構成されており、紙幅の関係上、一覽を記載することができなかった。

石井米雄 もうひとつの「王様と私」

前半は、24 の節からなる。モンクットが西洋の宗教や文化、言葉に関心をもち、学習した一連の流れを、おおよそ時系列に説明している。その大半は、「王様」が「私」と出会う前に培った関心や知識の形成過程についてであり、ミュージカル「王様と私」の中で描かれる「野蛮な東洋」の「王様」イメージに対する丁寧な反証である。その内容を簡単にまとめると、以下のとおりである。

モンクットは、ラーマ 2 世を父に、最高

位の王妃を母として、1804 年に誕生した。14 歳になるとタイ社会の慣例どおり少年僧として、20 歳の時には比丘として再度出家した。しかしその直後、父ラーマ 2 世が急逝し、後継国王は王妃の子であるモンクットだと思われた。しかし、これまで僧院生活しか経験が無いことや、何より西欧列強が東南アジアの国々に次々に進出して植民地化の危機が迫っていたという社会的背景から、16 歳年上の異母兄チェーサダーボディンがラーマ 3 世として王座につくことになった。そのため、モンクットは再び僧院生活に戻ることとなり、その中で培った交友関係や知識が、「シャムの近代化の進展の歴史」(p. 16) に大きな役割を果たすことになった。

比丘となったモンクットが真っ先に行なったのは、民衆の宗教生活を見て回ることであった。そうしてタイ文化における仏教のあり方やパーリ語を学ぶ傍ら、ラテン語の学習を開始する。この時、ラテン語の教師として招かれたのが、「もうひとりの私」であるパルゴア神父であった。

パルゴアは、当時モンクットが出家していた寺院近くの教会に所属しており、タイ語に堪能で、後にタイ語やタイ文化に関する大著を執筆した人物である。モンクットにはラテン語の他、近代科学についての知識も与え、「パルゴアは、モンクットにヨーロッパ先進諸国の文化を伝えた最初の人」となった(p. 32)。また同時に、「タイ文化への謙虚な姿勢」をもち、客観的にそれを理解しようとする人柄で、モンクットが国王になった後も絶大な信頼を寄せた人物である。

モンクットは、キリスト教をよく勉強して理解していたものの、あくまで西洋の文化や近代科学についての窓口として関心を抱いていたにすぎなかった。当時シャムには、パルゴアをはじめとするカトリックの神父の他、プロテスタントであるアメリカ人宣教師も多く居住していた。しかし宣教師らはパルゴアとは異なり、「キリスト教の福音を伝えることのみに急」(p. 54)で、シャムの文化を理解しようとしなかったため、モンクットが全幅の信頼を置くことはなかった。とはいえ、プロテスタント宣教師カズウェルからも英語を学ぶなど、宣教師を完全に排除したわけではなかった。いずれにせよ、モンクットがパルゴアとの親交を深めることができた要因は、両者が互いの宗教を押し付けず、尊重し合ったことにあるといえる。

その後モンクットは、1851年にラーマ3世が病で逝去すると、27年の出家生活を終えて還俗し、同年王位についてラーマ4世となった。即位してすぐに、『官報』を創刊したり、王宮の因習を廃止したり、中国への「朝貢貿易」をやめるなどし、守旧的だったラーマ3世の方針を180度転換した。さらには、1857年までの間に立て続けに3つの修好通商条約を締結し、その影響で旧権力の構造が再編を余儀なくされるなど、シャム国内の状況も大きく変わっていくことになった。

その頃になると、パルゴアは欧米の外交官たちの窓口として、さらにモンクットにとっても欠かせない人物になっていた。モンクットは、「ヨーロッパ人の目に野蛮と映るような慣習は、積極的に廃止させ」たが、そのた

めのヨーロッパ理解はパルゴアをはじめとする、カトリックの神父との交友を通じて培われたものであった(p. 82)。こうした中でモンクットは、自身が西欧の思想に触れたのが成人以降だったことから、より早い時期にヨーロッパの考え方を学ぶ必要があると考え、長子チュラーロンコーンのためにイギリス人家庭教師を雇った。それが、ミュージカル「王様と私」の「私」、アンナ・レオノーウェンスである。

パルゴアとモンクットの友情は28年間にわたったが、1862年にパルゴアはその生涯を閉じた。彼は、「外国人に対しては異例なほどの感謝の念を表明」したモンクットに見送られて旅立った(表紙)。

飯島明子解説 王様の国の内と外—19世紀中葉のシャムをめぐる「世界」

後半の解説部は、16節からなる。前半が、モンクットとパルゴア両者の人物像に焦点を絞って、物語的に叙述していたのに対し、後半は解説の名のとおり、両者の置かれた背景、特にシャムを取り巻く世界情勢について、広い視点から記述している。これにより、両者の行動の意味や、王としてモンクットが置かれた状況がさらに立体的になり、前半を際立たせている。

解説は、モンクットが王に即位した直後に締結した、バウリング条約を起点にすすめられる。「港市国家」として発展してきたシャムは、バウリング条約によって「開国」する以前から対外貿易が経済の基盤をなしてきた。とはいえ、同条約によって貿易の自由化

がもたらされ、既得権益の権力構造が大きく変革した。王室についていえば、その変化は「従来毫も自明ではなかった王室の範囲がまさにこの時代の王たるモンクットによって次第に限定され、秩序立てられるのであり、そうして顕現したモンクット・ファミリーが担うべき王権の正当性が確立されていく過程」として、大変重要な契機となった (p. 96)。

続いて第 2 節からは、「小国」シャムを取り巻く周辺諸国との関係について説明している。まず、当時のシャムについて理解するうえで不可欠なのは、国の領域が現在の「タイ」と同義ではないという点である。たとえば、シャムの北方にはラーオ人を国王とし、チェンマイを中心とするラーンナー王国があった。一方、現在のビルマ（ミャンマー）方面は、モンクットの即位当時にはすでに、イギリスの侵攻によってその力が弱まりつつあった。

このような状況の中でモンクットは、結果的にシャムとビルマの王朝間の最後の戦争となる、「チェントウン戦争」を仕掛けた。通説では、権力基盤の脆弱であったモンクットが、やむを得ず戦争を起こしたという消極的理由が挙げられる。しかし飯島は、この戦争が「シャムはイギリスと共通の敵と戦って」いることを示し、「国際社会に踏み出すシャム王の威信をかけた戦争だった」(p. 125) といえると指摘し、そのことはモンクットがバウリングに送った「私信」から推測できるとしている。さらに飯島は、モンクットとバウリングが交わした相当数の書簡の内容について、「ここにも『もうひとつの王様と私』があったと言いたくなるほどである」とも述

べている (p. 126)。

第 8 節からは、西欧との外交関係について話を展開する。「1855 年の『バウリング条約』締結はまた、王様の外交の始まりでもあった」(p. 135) とし、イギリスのヴィクトリア女王や、フランスのナポレオン III 世から親書を得るためのモンクットの努力と、それが実現した時の喜び様とに言及している。モンクットは、自身の英語を駆使して「アジアの中で『特別』に抜きん出た存在」としてシャムの存在を訴え、そう認められることが「さしあたり最上の喜びであった」(p. 137)。

ナポレオン III 世から親書を受け取ったモンクットであったが、その後のフランスとの関係は困難であった。それは、第 11 節と第 12 節に記述されている、カンボジアの領有権をめぐる混乱に始まった。

飯島は、フランスとの間で起こった問題には、モンクット自身というよりも、実務官僚たちの指示や動向が影響を及ぼした可能性もあるとしている。まず最初の軋轢は、フランス使節がカンボジアへ向かう際のスパイ行為が原因で生じたが、このスパイ行為はおそらく、当時モンクットとともに対西欧外交で活躍していた、王弟ウォンサーティラートサニット親王の指示であり、モンクットの関与については不明確だと指摘する。また、フランスがベトナムを植民地化した後、シャムがカンボジアに対する宗主権を完全に失うまでの両者間の関係の変遷についても、欧米使節から事実上の宰相とみなされたシースリヤウォンの台頭に注目する見方もあることから、モンクットの意向の反映ではなかった可

能性があるとしている。13 節では、こうしたフランスとの関係悪化を受け、モンクットが抱いたであろう、ナポレオンⅢ世への複雑な胸中について述べている。

続く 14 節では、これまで登場した西欧諸国の外交官たちに加え、アメリカやプロイセンの使節団などに言及し、「東洋」全体での動向の中にシャムを位置づけている。そして彼らの動きを、「西洋世界のアジア進出の一環を担い、西洋の支配する秩序による普遍化に向かって足並みを揃え」た動きであったとし (p. 176)、こうした西欧の価値観に対する、モンクットの深い絶望ともいうべき考え方に、最後の節で言及している。モンクットは、西洋人が自分たちを同じ「人間」としてではなく「動物」としてしかみておらず、そうした考えはキリスト教に起因すると考えていた。パルゴア神父と「深い友情」を涵養し、ローマ法王を『人間界の全人類』に慈愛を注ぐ「最大最高の博愛主義者」と呼びながらも、モンクットにとって『キリスト教文明』は、容易に太刀打ちできない『敵』であった」(p. 186)。

そして、彼は自身の知識を、キリスト教徒である西洋人と比肩しうるものであるとアピールすべく行なった皆既日食の観測旅行の際にマラリアにかかってこの世を去ることになった。

批評

以上、本書の概略を述べてきた。これまで、モンクット（ラーマ 4 世）とその当時の社会背景について、本書ほど多岐にわたっ

た観点から述べられたものは、管見の限りみられない。タイ史の研究ではラーマ 5 世以降に焦点があたることが多く、ラーマ 4 世より以前について、特に王たちの「思想」や「世界観」に焦点をあてたものはなかったからである。ミュージカルや小説の「王様と私」をとおして広まった「王様」モンクットのイメージが優先して流布したのは、そうした学術的要因もあるだろう。その意味で本書は、飯島が「あとがき」で書いたように「後学の方たちへの架け橋」として (p. 194)、当該期を理解するための必読書になっていくことは間違いない。

それだけでなく、現代タイの政治を研究する者にとっても、本書はタイにおける「国王観」を理解する一助となる。ラーマ 4 世は、官僚や朝貢国王たちと直接文書をやり取りするための宸筆と上奏文を取り入れた人物である [川口 2013]。これは、地方からの上奏文や自身の地方行幸を重視した現国王プーミポン（ラーマ 9 世）の行動や、それを通じた政治的影響力の拡大という点にも共通点があり、興味深い。

あえて本書に注文をつけるならば、次の点を挙げたい。国王が西欧との関係を構築する過程を描いた本書の目的からはずれてしまうが、モンクットの側近たちに関する言及があれば、より「王様」モンクットの人物像の記述に厚みが出たのではないだろうか。たとえば本書には、カンボジア問題について、側近ともいうべきシースリヤウォンら重要人物に関する指摘がある。そうした側近らとモンクットの関係がより描かれれば、宮中で「王

様」が置かれた立場について、また「王様」を取り巻く周辺の人物たちの世界観について明確になり、モンクットの先見性が際立ったのではないかと考える。ただ、タイの歴史研究では、いずれの時代についても、側近たちや国王のブレーンとなった人物たちへの言及が少なく、これはタイの歴史や政治、王制研究全般にいえる課題であるかもしれない。

上記の課題を含めても本書が良作であるといえる最大の理由は、前半と後半が絶妙なバランスで構成されている点にある。前半と後半は、それぞれモンクットの生涯の「陽」と「陰」とを描き出しており、それを通じてモンクットが如何に困難な時代を乗り越えたかがよくわかる構図になっているからである。

本書はもともと一冊の本として構成されたものではなく、前半は急逝した石井による未完成の原稿であり、「典拠が全く示されていなかった」うえ、「典拠として参考しうる、まとまった資料はとうとう見つからない」状況だったという (p. 194)。その石井の原稿をそのままの形で残し、かつ全体の流れを損なわないような註釈を付け加えるという作業が、相当な労力を要したであろうことは、想像に難くない。

石井の文章は、あくまでも『王様と私』への反証であるためか、モンクットについてやや楽観的に記述されている。モンクットがパルゴアら友人をとおして西洋と「出会い」、友人との交流によって西洋への理解を深めていく様子が良くわかるものの、そこにあるモンクットの「王様」としての苦悩はあまり伝わってこない。一方、後半の飯島の解説から

は、シャムの置かれた状況に視野を広げることで、「王様」としてのモンクットが、西洋に対して最後まで深い絶望ともいえるべき感覚をもっていたことへ言及している。

こうした見方の違いは、両者が焦点をあてている時期が異なるからだとも見えるかもしれない。前半は、モンクットが産まれてからパルゴアが死去するまで、後半は、モンクットが王として即位してから死去するまでが対象だからである。しかし、パルゴアが逝去した6年後にモンクットもこの世を去っていることから、本書の前後半はほぼ同時期について記述しているといえる。そのため、パルゴアの死後、モンクットが西欧への絶望に突然悩まされるようになったとは考えにくい。つまり、本書が描いているモンクットの「陽」と「陰」は、まさに、分析対象がひとつ（一人）であっても、書き手の視点や切り取り方によって大きく異なる歴史観が描けることを示しているといえよう。そうした実践を一冊の本にまとめたという点で、本書は歴史記述の新しい挑戦だといえる。

モンクットは、西欧諸国の国王たちに多くの親書をしたため、その内容は西欧に対して常にへりくだった姿勢を保っていた。これは、シャムを守るうえでは賢明な判断だったかもしれないが、「東洋の野蛮な」国の国王として自身を描いたのは、誰よりもモンクット自身だったかもしれないとすら思わせる。その考えに至る時、タイで『王様と私』が不敬罪であるとして上映禁止になっている理由がわかるような気がする。

前半を「王様と私」の裏にあるもうひとつ

の物語として、後半を当時のシャムを理解する歴史研究として、そして一冊を歴史記述の挑戦として、専門家だけでなく、広く一般の人々にも読んで頂きたい。

引 用 文 献

川口洋史. 2013. 『文書史料が語る近世末期タイーラタナコーシン朝前期の行政文書と政治』
風響社.